

長い間の裁判、ご苦労さまでした。働いて甲斐のない仕事だったとお思いでないどころか、人間、時には真実と自分が信じるもののために、労力も時間も捧げる爽やかさをお感じになっていることだと思います。

私は今年80歳になりますので、自分の死をそう遠くないものとして眺められるようになりました。私は極めていい加減なキリスト教徒で、普段はクリスチヤンだということさえはばかられるほどなのですが、この頃、死後の世界に入る瞬間に愉しみに思えるようになりました。そこでは、私が生前に持っていた迷妄がすべて正され、透明な視力のいい眼で眺めるような世界が開けることを信じられるようになって来たのです。そして現世では、その本質が見えなかつた人たちがそこでは生き生きとその本来の姿で生きていて、私を迎えてくれるような実感さえあるのです。

私たちは少なくとも、証明できなかつたことによって人を弾劾するという、人間の暴挙を犯さなくて済みました。神に代わって大悪人だと人を告発するような思い上がりにも加担しなくて済みました。

裁判の判決にかかわったすべての裁判官たち、またそこに民意を誘導したマスコミ人たち、勇気をもって真実を発言しなかつた沖縄の人たちが、その責任を負うでしょうが、私たちは人生の判断の危うい断崖の岸に立ちながら、神でない人間には不明の部分がれっきとしてあるという厳しい現実を自覚することによって、人を糾弾したり自分もまた精神的暴徒となってその危険な高みから転落するという愚も犯さずに済みました。

当事者の方たちの無念を思うと、部外者の私が申しあげられることではありませんが、たとえば戦争の中の不義をただし正義を求めるということでさえ、私に言わせると過去をふり返ることです。ですから私は本質的には戦争は語り継げないものだ、また語り継ぐ必要もないものだ、と長い年月思ってきました。戦争に加担した当事者は、その都度、その愚を自覚し、責任を負うほかはないものだと思っています。私をも含めて人間は、いつもその愚を冒しているのかもしれません。

今日から皆さんには、生きる限り、私たちがこよなく愛するこの祖国日本の明日のために、一歩でも歩き続け、その結果として或る日人間の任務の解放としての死を迎えて頂きたい、と願っています。戦争中亡くなられた方たちのおかげで、私たちはいい戦後を生きられました。日本は世界でもっとも天国に近い、平等で格差のない、いい国です。それが世界の125カ国の最貧層を見て来た私の感想です。

私はつい2週間ほど前、マダガスカルで医療を受ける方途もお金もないままに放置されていた貧しい子供たちの、口唇口蓋裂の手術を、日本のドクターたちにしていただく仕事の「後方支援」を終えて帰つて来たところです。私たちは、常にどこの國の人であろうと、若い命のために、少し手伝つて現世を終えた方が楽しいでしょう。それが沖縄のすべての死者たちの希望でもあったかもしれません。

ほかに申しあげるべき言葉もありません。心から「お大切に、さようなら」を申しあげます。